

渡辺信一郎著

## 『中国古代社会論』

葭森健介

戦後、中国史研究は経済史の分野で、顕著な成果をあげた。それは、所謂「世界史発展の基本法則」の中国史への適用をめぐる研究活動に依る所が大きい。奴隸制、封建制、資本主義萌芽を主題とする時代区分論争は、一九四〇年代から六〇年代にかけて、中国史研究界を風靡した。しかし、中国社会の特質は、ヨーロッパ史から生み出された概念の、自己の世界への安易な適用を排除した。中国古代史においては、皇帝を頂点とする専制的中央集権体制と、その下で広汎に存在する小農民の問題を説明する必要から、研究主題は国家（イデオロギー）論へと傾斜し、経済史研究の地位の相対的低下を見るに至る。更に、七〇年代以降の社会の閉塞状況と価値観の多様化は、研究関心、研究対象の分散化を生み、中国史の体系的把握を目指す試みも、次第に見られなくなってきた。

こうした状況の下にあって、国家と小農民の問題を、小経営生産様式論の立場からとらえ、中国史の体系的把握とその世界史的位置付けを試みると活動してきたのが、京都大学東洋史出身の中堅、若手研究者の有志からなる中国史研究会である。

本書の著者、渡辺信一郎氏もまたこの研究会に所属し、小経営生産様式の成立と発展という観点から、中国古代社会とその中世社会への展開について、意欲的な研究をすすめてきた<sup>①</sup>。本書は、こうした渡辺氏の旧稿のうちで、農業経営に関わるものに改訂をほどこすと共に、新稿も加え、先秦から唐宋変革に至る、農業社会と国家との関わりを、通時的に論じたものである。

I

本書の全体像を知るために、まず編別構成を見ておきたい。

緒論 中国古代社会論の現状と課題

第一部 分田農民論

第一章 古代中国における小農民経営の形成

第二章 阡陌制論

第三章 分田農民論

第二部 富豪層論

第四章 二世紀から七世紀に至る大土地所有と経営

第五章 富豪層論

第三部 中国古代農村の社会構成

第六章 唐宋変革期における農業構造の発展と下級官人層

第七章 小結——中国古代農村の社会構成

以上の様に、本書は、中国古代社会に関する先行研究の成果と今後の課題を分析した緒論と、中国古代における小農民（経営）の形成と発展（第一部）、漢代に小農民経営の中から発生した私的大土地所有の性格とその展開（第二部）、唐宋変革期をささむ小農民経営の発展とその歴史的意味（第三部）をそれぞれ具体的に述

べた本論三部からなる。書評を進める上で、まず押えておくべきは、渡辺氏が設定した、中国古代史の研究課題であろう。氏は緒論で、以下の様に議論を展開してゆく。

中国古代社会に関する現時点での有力な考え方は、〔Ⅰ〕漢末三國期以降中世社会論、〔Ⅱ〕戦国期以降（総体的）農奴制社会論、〔Ⅲ〕個人身身的支配体制論（齊民制社会論）、〔Ⅳ〕アジア的生産様式（總体的奴隸制）論の四類に大別される。とはいえ、大土地所有に包摂されず、国家に対し政治的に従属している小農民層の広汎な存在を立論の前提とする点では共通する。にもかかわらず、四説はいずれも、その小農民（経営）の社会经济史的規定をほとんど欠き、小農民と大土地所有との（諸経営間の相互関係としての）經濟構造の分析も十分でない。また、唐宋変革を古代と中世の分期とする、堀敏一氏等の個人身身的支配論にあっては、唐代以前の国家——小農民基軸論を、宋代以降の地主——佃戸論につないだため、その移行論に不自然さが見られる。以上の問題点を克服するには、小農民層に対するより豊かな概念的把握と、戦国期から清滅亡に至る前近代中国の社会の特質を、一貫して国家と小農民層との基本的生産関係でとらえる試みとが必要とされる。その際、(1)従来社会经济史的規定を欠いていた小農民層の具体的存在形態の解明、(2)大土地所有者、中小地主、自作農、自小作農間の具体的農業構造、及び農村の社会構造をふまえた、一般農民（小農民）層と大土地所有の相互規定関係の再把握、(3)私的土地所有実現に見られる均田小農民の国家に対する自立過程論に基づく唐宋変革の再評価の三点が、具体的課題として設定される。

以下、第一部から第三部の本論は如上の問題設定に対応する形

で進められてゆく。すなわち、農業技術、労働力組織等の直接生産過程、家族形態、村落の社会構成、国家的土地制度等の問題が、各時代ごとに分析され、その相互の関連性、変化についての検討が加えられる。その結果、中国においては戦国期に小農民経営が形成され、古代を通じて発展していったこと、しかし、小農民経営は確立しておらず国家の上級土地所有権の介入を受けたこと、古代において見られた富豪層の大土地所有も私的占有段階に留っていたこと、農法の改良により唐宋変革期に小農民が国家に対し自立度を高めて行ったこと、等々が指摘される。その上で、唐代以前を国家的奴隸制、宋以降を国家的農奴制と、それぞれの社会を規定するのである。

この様に本書の特長は、緒論で設定された研究課題と密接に関係する以下の三点にあるといえよう。すなわち、(一)直接生産過程（労働過程）をふまえて中国古代史を再構成したこと、(二)その際、国家的土地所有と小農民経営、富豪経営相互の関係を分析し、国家の上級土地所有権を重視したこと、(三)その結果、唐宋変革を小農民層の自立過程として再評価したことの三点である。この三点は、先行研究に比べても、際立った特長であり、氏の研究成果として評価されるべきものである。そこで、本書評では、この三点を取りあげ、その論旨、意義、課題について考察を加えてみたい。

## II

先に挙げた三点のうち、最も注目されるのは、第一の直接生産過程をふまえた中国古代史の再構成にある。

戦後まもなく、時代区分論争と共に盛んになった中国經濟史研

究は、生産手段（特に土地）の所有関係、生産物の分配・収奪の構造、その総体としての土地制度、階級関係に重きが置かれ、その基礎となる生産力、生産過程等の問題は等閑視されていた。確かに、農業史研究の分野では、加藤繁氏、天野元之助氏、西山武一氏等によって、主として作物論ないしは墾耕法などの技術的展開を中心課題とする研究が進められていたが、時代区分論争に關わる経済史研究とは次元を異にしていた。中国経済史研究にとって、この両者を関連付ける視角が必要なのは言うまでもない。一九六〇年代、西嶋定生氏は、この様な関心から、一連の農業史研究を発表したが、十分な成果を収めるには至らなかった。つまり、戦後の中国経済史研究の流れの中で、直接生産過程（経営）をふまえた中国古代社会論は、最近に至るまでほとんどなかったといっても過言ではなからう。

これに対し、渡辺氏は、農具・耕作法等の農業技術や農作業における労働力の組織等、労働過程に關わる諸問題を、『齊民要術』等の農書、『國語』、『漢書』等に残る農業をめぐる議論、その他諸々の史料で描かれる農耕の風景、及び様々な考古学的な資料を用いて、詳しく分析した。また一方で、先人の研究成果、あるいは独自の史料を用いて、当時の社会構成、土地制度を明らかにしている。だが、最も注目すべきは、その両者を結びつけて、中国古代社会論を展開した点にある。

すなわち、戦国期に始まる、鉄製手労働農具を使用し、施肥により保沢効果・地力維持を計った年一作方式の小農法をもとに、個別家族を基本単位とする小農民層の形成、輾田制から阡陌制への移行を説明する。また、漢代に起った牛墾耕による農法を、富

豪層の形成と彼等による小農民支配の実現、阡陌制の崩壊、国家による土地規制（占田・課田、均田）の背景に位置づける。さらに、唐宋変革期の、富豪経営内部での奴婢・奴隸の自立、分田小農民の国家からの自立、及び豪富・形勢層、中戸・中産層、貧家（佃戸）層の形成が、手労働耕起用具の改良・進化、牛墾耕の小規模化、秋耕の実施といった農法の変化によって論じられる。

ただ、農法と社会構成・土地制度とは直接結びつくものではない。そこで、氏は両者の間に媒介項となる観点を設定している。戦国期の小農法と小農民層の形成とは、男女二人の耦耕と家族労働の關係で、また、阡陌制の成立とは、農地割替の消滅と恒常的地割の実施という観点で結びつけられている。牛墾耕と富豪層の形成、小農民支配については、有牛、無牛両者の生産性の格差、牛と人力との労働力交換の必要性が媒介項となる。牛墾耕と阡陌制の崩壊の關係は墾耕の長矩形耕地への適合性が理由とされる。唐宋変革期の奴婢・奴隸、小農民の自立過程及び富豪層の變質が、土地（労働手段）と農民（労働力）との結合の緊密化、経営の自立性という見方によって、農法の変化と関連付けられる。

この様に、労働力（農民）と労働対象・労働手段（土地）との結合のしかた、土地割替の有無と土地制度、耕法と土地境界・労働力編成・労働力交換・経営の自立性との關係といった観点を媒介項として、労働過程（生産過程）と社会構成、土地制度を連関性をもって説明した所に、氏の研究の独自性がある。これにより、中国古代経済史研究は新たな段階へと進んだといえよう。

ただ、一つ指摘しておくべき点があるとすれば、労働過程、社会編成、土地制度等については、史料をふまえてかなり具体的

に述べられているのに比べ、その媒介項となる部分となると、史料より論理が先行し、具体性にやや欠けてくることである。

たとえば、阡陌制の崩壊を牛犁耕に求めた氏は、趙過の代田新法の内容を詳しく検討し、五頃の耕地を二牛三人で耕すという耕起過程を導く。更に、その五頃の耕地の形状を、一〇〇歩×一二〇〇歩と仮定することにより、青川田律に規定される阡陌制の片側一片と合致させ、阡陌の畛や陌を無視した耕作がなされていたと結論する。その理由は、「犁耕を行うには、耕地が細長く犁の反転回数が少ないほど作業効率がよく合理的であり、「陌は一つの阻碍要因」となることから、「陌や阡の一部はつぶされ、犁耕に適合的な耕地が作られていった」というものである。誠にささやかな論理のはこびであるが、そこにはまず、代田新法の五頃の形状を一〇〇歩×一二〇歩とする仮定が存在する。その上、犁耕にとって、長矩形の耕地が有利であるとすることは論証がない。一般に、犁耕と耕地の形状との関係は、車輪の有無、床（とこ）、轆（ねりぎ）の長短で異なってくる。長矩形耕地に適合するのは、有輪、長床、長轆の型の犁である。有輪犁は中世北フランス等で使用されたものであって、アジアの犁はすべて無輪犁（アレール）に属する。また、長床犁は、現在中国で幅広く使用されている型ではあるが、中国で長床、有辮（犁へら付）の犁による平坦（反転）耕が成立するのは、渡辺氏も指摘する通り、後漢末のことと考えられている。従って、西山武一氏は、趙過の代田新法を、無床、無辮の犁による壟溝（反面耕）を前提としていたものと想定し、天野元之助氏も趙過の耦犁を、有床、無床両方の可能性から分析し、断定を避けている。更に、長轆犁は、後

漢末の遼東、北朝の華北平原で使用されていたものという。果して、前漢武帝期にはどの様な型の犁が使われていたのであろうか。こうした犁型の問題を抜きにしては、犁耕と耕地の形状の関係を確定しえぬ様に思われる。

また氏は、唐宋変革期の農民的土地所有の物的基礎として、「秋耕の発達による容器的労働手段としての耕地への関係の深化」を挙げる。つまり、秋耕による耕起整理過程が、「冬期もふくめた通年の土地利用を農民に要求する」だけでなく、「土地のもつ水分・養分の保持力を高め」、「土地の容器としての性格を増進」させる。これにより、農民は、「労働手段としての土地に二重に関係し」、「いつでも解消される可能性を内包する」外在的な関係でなく、耕地に対する「より有機的な利益関係」と「自立的な労働過程」とを作りだしようと述べる。土地生産高を高めるための、集約的な労働投下が土地と労働者（農民）との関係を強化することは、一般論として認められる。ただ、この場合も、秋耕の実施が土地と農民の関係について、「いつでも解消される可能性」を否定しうるだけの集約度なのかどうか、十分な検討が必要とされよう。土地と農民の結合関係は、土地に対する労働投下の集約度の他、それをとりまく自然的社会的環境にも影響される。また、秋耕実施以前の施肥等にも、「土地の容器としての性格を増進」させる側面があったのではなからうか。こうした点で、秋耕の実施が、農民と土地との関係の緊密度をどの程度高めたものなのか、更なる分析が必要な様に思われる。

ここでは、二例を挙げて、労働過程と社会構成、土地制度を結ぶ媒介となる論理について検討を加えた。そこには、史実と史実

とを現代の経済学の論理でつなぐという、氏ならではの分析手法が見られる。この手法により、中国古代社会の構造的把握は一層深化した。ただ、他の部分に比べ、この部分に、論理が先行し、やや抽象的になる傾向が感じられる。それは、氏の分析手法がもつ諸刃の剣なのかも知れない。すなわち、現代の経済理論が、ヨーロッパ的近代の価値観を媒介に構築されたものであるだけに、その中国古代への適用にあたっては、慎重な手続が要求される。そこで、経済的概念と歴史の実態との具体的対応が必要となる。それにより、氏の手法はさらに精緻なものとなり、中国古代経済史も一層豊かさを増すであろう。

### III

本書の第二の特長、國家的土地所有と小農民経営・富豪経営相互の關係の分析、及び國家の上級土地所有權の重視は、中国古代（唐以前）を國家的奴隸制、中世（宋代以降）を國家的農奴制と定義した点に端的に表われる。そもそも奴隸制、農奴制という言葉の上に「國家的」の三字を冠したこの概念は、渡辺氏等中国史研究会のメンバーに多大な影響を与えた中村哲氏によって検討されてきたものである。中村氏は、小経営が支配的で、その上に專制的集權國家がそびえたつ、前近代アジア社会を説明するために、この概念の理論的構築を行なった。一方、中国前近代史研究にとつて、大土地所有に包摂されず、自己の土地を耕作し、直接國家に隸屬する小農民層の広汎な存在をどう把握するかは、重要な課題であった。渡辺氏は、中国前近代史研究の課題と、中村氏によつて鍛えられた経済史の概念を結びつけることで、本書の筋立て

を作り上げたのである。当然そこで問題となるのは、小農民層・富豪層の土地に対する関わり方、及び國家との關係である。この点について、氏は以下の様に説明する。

戰國期に成立した阡陌制により、農民は百畝の土地を分田（個別利益地）として保有する。しかし、小農民（分田農民）は、貢租、貢賦、軍役義務を通じて、農民的剰余を國家に収奪される。また、小農民経営の不安定さは、不作時等の再生産の物的基礎を、二次的集團所有地として國家に領有された山林藪沢に仰いだり、勸農等を通じて國家の勞働過程への干渉を受けたりする結果をもたらす。漢より起つた牛耕は、分田農民の階層分化に拍車をかけ、公田・山林藪沢を侵奪・横領して、家父長的奴隸制経営を行なう富豪層を生み出す。これに対し、國家は、占田・課田、均田等の土地規制を実施し、分田農民に土地を授け（受田）、その反対給付として、戸調、租・庸・調の形で、農民的剰余の収奪を続ける。また、富豪層に対しても、官品体系による土地保有額の格付け、耕牛・奴婢への給田によつて、事実上、私的占有を黙認し、その反対給付として地代を取取る。加えて國家は、人力と耕牛との勞働交換、その他の勞働力編成を通じて勞働過程へ干渉する。この様に、漢六朝では、農民は貢租、貢賦等の形で國家に農民的剰余を取奪され、國家による勞働過程への干渉を受けている。従つて、彼等は結局國家的土地所有の下で、自らの土地を私的に占有しているにすぎない。隋唐に至り、富豪層や王公百官層の山林藪沢の横領は激化し、農法の發展に伴ない分田農民も自立してくる。そこで、國家は、官人永業田の設定等により、私的土占有を合法化し、給田規定も抽象化して、その対象を土地から丁（人）へ

と変化させる。こうして、国家は、名目としての均田制をなんとか維持しつつ、反対給付たる租・庸・調を収取する。同時に、国家の労働過程への具体的干与も希薄化してゆく。そして最終的には、国家の二次的集団所有の最後の歯止めだった均田制も完全に崩壊するに至り、土地規制、労働過程への干与等によって成し遂げられていた、国家の私的土地占有の統一的編成政策は放棄される。これに代わり、国家は、私的土地所有の有無、多寡を基準とする主客戸、五等戸制を通じて、自作地をもつ自立小経営農民を主戸として把握、彼等の国家に対する政治的臣従関係を媒介に、兩税・附加税の形をとる地代を収取し、農民的剰余の収奪を続ける。こうして、宋代集権国家も、主戸層の事実上の私的土地所有の上に上級土地所有権を措定したというのである。

つまり、国家が、貢納、貢賦、地代、附加税等の形で農民的剰余を収奪すること、換言すれば、小農民経営が国家の上級土地所有権の介入を許すことこそ、奴隸制、農奴制の上に「国家的」の三字が加えられる所以なのである。更に、農民層が、国家による労働過程への干与、私的土地占有への規制を排除してゆくことを以て、小農民の自立、奴隸制より農奴制への発展の指標としている。要するに、渡辺氏は、農民の私的所有に対立し、貢納等の形で農民的剰余を収奪する国家を措定することにより、中国古代社会の構造と展開を叙述したのである。では、この様な国家はどこから生まれたのか、何故に農民的剰余を収奪しうるのであろうか。

評  
氏は中国における国家の形成を次の様に述べる。阡陌制の成立により、小農民層は土地に対する世襲的占有権が認められる。それと共に土地売買が始まり、階層分化、階級対立が起こる。国家

は、その解決をめざして必然的に形成されてくると。これは、エングелスの国家論に依拠して筋立てがなされている。ではエングルス自身は何を以て国家と考えるのか。彼は、国家の成立を氏族制度の諸機関が、国家官庁に置きかえられた時点におく。すなわち、(1)血縁でなく領域(地縁)による国民の組織、(2)住民の自発的な武装組織に代って成立した、市民をも制御する武装組織たる公権力、(3)公権力を維持するための租税の徴収が国家を特徴付けるものと定義する。渡辺氏の考察によれば、阡陌制とは、氏族より析出された個別家族を阡陌という地割の下に組織し、国家の軍事領域の最末端を分有すると共に、貢賦を負担させるための制度なのである、とすれば、阡陌制下において、すでに国家は成立していたと考えねばならない。従って、エングелスの国家論に基づき、国家形成を説明するには、阡陌制成立以前における、(商品)交換、階層分化、階級対立の存在とその具体的様相が示されなければならぬ。しかし、氏は、鄭里廩簿等を分析し、前漢期に階層分化(階級対立ではない)があったという史実のみを前提として、時代を溯らせて国家の形成を説明しているにすぎない。

また、階級対立を解決するために形成された国家が、何故農民的剰余を収奪しうるのか。氏は、氏族制的邑共同体維持のための肯定的奉仕物||社会的必要労働が、田租、貢賦へと転化し、国家の農民的剰余収奪の手段となり、氏族制的邑共同体の共同領有地山林藪沢が皇帝(国家)の領有によって、集団所有の二次的形態として、国家の土地規制、労働過程介入の物的基礎となったという。これは、共に先人の研究成果に、氏が経済史的概念を付与し、国家の上級土地所有権の由来を説明したものである。以上の様に

考えたとしても、階級対立調和機関として形成された国家と上級土地所有権の由来がどの様に関係するのか、この点については全く言及されていない。また、氏族共同体の労働・供物の提供がどの様にして、国家による農民的剰余の収奪へと転化してゆくのか、帝室の家産となった山林藪沢を何故国家による集団所有の二次的形態の領有と呼びうるのか、氏自身の分析はなく、経済史の門外漢にとつては史実と概念の間でとまどいを感じざるを得ない。

氏は、農民的剰余を収奪するという意味で上級土地所有権をもつ国家と、私的土地所有を実現できない農民を対極に置くことにより、中国古代社会の構造的把握を行なった。ただ、その国家の成立、性格という本質的部分については未だ抽象性が感じられる。従つて、本書においては社会構造を説明するために、国家が外在的に設定された観がぬぐえない。国家を社会に内在化させてとらえるというのは、中国古代史の中心的課題であり、渡辺氏自身もこの点に関心を寄せていた。氏は、本書に収録されていないが、<sup>⑨</sup>国家、社会のイデオロギーをめぐる独創的な研究を発表している。これらのイデオロギー研究と本書における構造的國家論を結びつけ、より具体的で、社会に内在化した中国古代國家像が描かれることを期待したい。

#### IV

渡辺氏の研究の第三の特徴は、唐宋変革を、國家的奴隸制から國家的農奴制への発展と位置付けたことである。氏は、唐宋変革を堀氏の様に、均田農民層の分解——一部の上昇と一部の没落——による地主—佃戸制（農奴制）の成立としてとらえるのでな

く、小農民經營の全体的な自立・上昇過程として描いた。小農民經營の中には、富豪經營下の奴婢・奴隸から、分田小農民まで含むが、中でも注目されているのは、分田小農民の國家からの自立過程と、彼等による中戸・中産層の形成である。彼等が國家の労働過程への干渉を排除し、土地に対する事実上の私的所有権を保持したことを以て、國家的奴隸から國家的農奴への上昇と位置付けたのである。

この唐宋變革の評価の是非については、六朝史を専門とする評者の力の及ぶ所ではなく、当該時代の専門家の議論に委ねたい。ただ一点、素人の疑問がある。氏の論によれば、宋代集權國家は、小農民層の自立に伴ない、直接労働過程への介入、私的土地占有への規制も放棄し、農民的剰余の直接的収奪という面では後退する。にもかかわらず、政治的に見るならば、内藤湖南以来指摘されている通り、皇帝權は強化され、より強力な中央集權的國家体制が成立する。唐宋變革における、國家の小農民への直接支配の後退と、政治面での強大化というパラドックスをどの様に理解すればよいのか、換言すれば、國家の經濟的性格と政治的性格の關係をいかに整合的に説明しうるのか、興味深い所である。そのために、國家のもつイデオロギー性と經濟構造を結ぶ視角が鍛えられねばならない様に思う。<sup>⑩</sup>

#### V

以上、渡辺氏の本書に於ける研究の到達点を三点に整理し、その内容、意義、課題について考察してみた。經濟理論に不案内な評者が、精緻な經濟理論によって組立てられた本書の意図を、ど

ここまで正確に理解しえたかは甚だ不安である。また氏は、論理構成の過程で、阡陌制の成立、阡陌の形状、「分田劫飯」の理解をはじめとして、個々の史実についても、随所に新説を提示している。これらに関しても、本来言及すべきなのであるが、魏晉一時代を専門とする評者の手にはあまるもので、あえてふれなかつた。見方を変れば、本書はそれだけ、問題提起に富んだ著作といえよう。

中でも、注目すべきは、機械論的唯物史観に基づく中国経済史を克服し、新たな中国史の体系的把握を試みた点にある。これは、渡辺氏のみならず、氏の属する中国史研究会のメンバーに共通する点である。メンバーの一人、吉田滋一氏は、一九四九年を原点に据えた、機械論的、教条主義的唯物史観、人民闘争史観を批判し、小経営生産様式論によって今日の人民公社解体、小農業復帰を見事に説明している。この様に、小経営生産様式論は、中国の前近代から現代に至るまでの、社会構造の特質を合理的に説明するものとして、今後注目を浴びるであろう。

しかし、氏等が克服の対象とした、機械論的唯物史観、人民闘争史観は、生産手段の共同所有、生産物の平等分配による階級社会の止揚、平等社会の実現という未来像を描き出した。また、六〇年代から七〇年代にかけて、機械的唯物史観を批判し、独特の中国中世論を打ち出した、谷川道雄氏、川勝義雄氏は、アジアにおける近代の特殊の様相に目を向け、ヨーロッパとは異なる歴史の推進力を中国社会に見出し、積極的評価を加えた。

この様に小経営生産様式論に先行する諸研究は、ある意味で研究対象の中国社会に積極的価値を見出し、その現代日本にとって

の意義を問う所から出発した。その際、氏等が歴史を推し進める原動力として積極的に評価したのは、直面する経済的状况を政治的イデオロギーにより克服し、新たな社会を作り上げようとする、中国人のエネルギーであった。これに対し、渡辺氏等は、中国社会のあり方を規定する経済的諸条件を厳密に分析し、それに対応する社会像を提示する。この違いは、目前の現代社会(中国)をどの様に認識し、どの様に関わるかという、研究者個々人の研究姿勢の問題に還元されるものかも知れない。しかし、中国史研究の課題として、次の点が留意されるべきであろう。

経済的諸条件を無視して社会が成立しえないことは言うまでもない。ただ、中国社会では、王朝末期の大規模な宗教反乱、最近の文化大革命の様に、その変革に際し、時として経済情況をも無視したスローガンの下に結集された民衆運動が起っている。一面では、こうした一見不合理とも見える、一種異様な民衆のエネルギーが現代中国を形作ったことも看過しえない。また、自由な経済活動を様々な形で制限する政策が、政治的意図により数多く行なわれてきたことも事実である。渡辺氏等が、これら中国社会の特質をいかに自己の論理に組みこんでゆくかが、従来の研究との関わりで問題になってこよう。

反面、経済的諸条件をふまえた中国史の再構成を目指す小経営生産様式論は、その問題提起の大きさから見ても、今後の中国史研究に多大の影響を与えるだろう。それだけに、本書の出版を契機に、様々な観点から、それぞれの分野で議論が起こり、中国史理解の一層の深化がもたらされることを期待したい。



- ① 中国史研究においては、漢代以前を古代とする説と、唐代以前を古代とする説があるが、ここでは便宜上、渡辺氏に従い、唐代以前を古代、宋代以降を中世と呼ぶことにする。
- ② 加藤繁、『支那經濟史考証』（東洋文庫刊、一九五二）下巻第五十三、五十八章の諸論稿、天野元之助、『支那農業經濟論、上・中』（改造社刊、一九四〇—四二）、『中国農業の諸問題、上・下』（技報堂刊、一九五二、五三）、西山武一、『アジア的農法と農業社会』（東京大学出版会刊、一九六九）所収の諸論稿
- ③ 西嶋定生、『中国經濟史研究』（東京大学出版会刊、一九六六）第一部の諸論稿
- ④ マルクトロブロツク、『フランス農業史の基本性格』（河野健二訳、創文社刊、一九五九）第二章
- ⑤ 西山、『齊民要術の農学』（『アジア的農法と農業社会』、前掲所収）天野、『中国農業史研究』（御茶の水書房刊、一九六二）第三編第二章
- ⑥ 同前
- ⑦ 中村哲、『奴隸制・農奴制の理論』（東京大学出版会刊、一九七七）
- ⑧ エンゲルス、『家族、私有財産、国家の起源』、第四章、及び九章
- ⑨ 代表的なものとしては、『仁孝』——あるいは二七世紀中国における一イデオロギー形態と国家——、『史林』六一—二、一九七八、『清』——あるいは二七世紀中国における一イデオロギー形態と国家——、『京都府立大学学術報告』人文三二—一、一九七九、『荀子の国家論』、『史林』六六一—、一九八三）、『孝経の制作とその背景』

『史林』六六一—、一九八六）

⑩ 氏は、唐宋変革を境に、分業論的國家編成から所有論的國家編成へと國家形態が変化したという。その際、國家（皇帝を中核とする官僚制、衛兵）の社会との分離という視角を提示する（『前近代中国における専制國家形態についての覚悟』、『新しい歴史学のために』一五八、一九八〇）。この視角は、唐宋變革期における、國家の政治面での強大化と經濟面での後退という現象を考える上で、注目すべき視角となる様に思われる。

⑪ 吉田滋一、『現代中国認識と中国史研究の視角』、『中国史像の再構成』中国史研究会編、文理閣刊、一九八三所収）

⑫ 谷川道雄、『東洋史研究者の現実と学問』、『中国社会の構造と知識人の問題』（共に『中国中世社会と共同体』国書刊行会刊、一九七六に所収）、川勝義雄、谷川道雄、『中国中世史研究における立場と方法』（『中国中世史研究』、中国中世史研究会編、東海大学出版会刊、一九七〇所収）

⑬ こうした民衆運動の歴史的役割を積極的に評価するものとして、小林一美、相田洋氏等、青年中国研究会議のメンバーによる研究が挙げられる。『中国民衆反乱の世界』（青年中国研究者会議編、汲古書院刊、一九七四）、『続中国民衆反乱の世界』（青年中国研究者会議編、汲古書院刊、一九八三）参照。

（A5版 三三六頁 一九八六年九月 青木書店 六五〇〇円）

（徳島大学総合科学部講師